

大野ミニバスクラブ

勝利と敗北を知る

西蒲・燕ミニバス大会
で大野小が準優勝

第一回西蒲・燕地区ミニバスケットボール大会が二月二十六日、吉田町総合体育館で行われ、大野小学校が準優勝しました。

大会には八チームが参加し大野小は一回戦、燕ミニバス教室を42-0で大勝、二回戦は吉田小と大接戦の末12-11で勝ち決勝へ進みました。決勝では中口東小に前半リードしたものの後半逆転され、6-12で敗れました。

この大会を目指して、毎日練習していた大野小の子供たち、勝つことだけでなく敗けることも知りました。

毎日練習しました



大野小6年 塚田美和子

わたしたちは、十二月二十六、二十七日に行われた新潟県BSN杯大会に出場し、初優勝しました。この大会で自信と力をつけ、練習にはげました。今回の大会を目標に無我夢中でした。

わたしは、このままがんばれば「優勝できる」と思うと気がありました。大会ではわたしたちは勝ち進み、決勝で中之口東小と対戦することになりました。わたしは「相手が中之口東小でも勝てる。絶対勝てる」と思っていました。

最初、三対二で勝っていたので、このままだと「優勝」と思いました。しかし、逆転されてしまいました。十二対六で負けてしまいました。

わたしは中学校に行ってもバスケットを練習したいし、大会にも出場したいと思っています。中学校に女子バスケット部を作ってもらい、基礎からやり直したいと思っています。

中学でも続けたい



大野小6年 坂井裕希

大野小学校にミニバスケットクラブができたのは、五年のときでした。本格的に練習したのは六年になってからです。わたしたちは、一日も休まず練習にはげました。

国民年金広報コンクールで知事賞

国民年金市町村広報コンクールが二月十四日に行われ、本町は企画・キャンペーン部門でみごと知事賞を獲得しました。

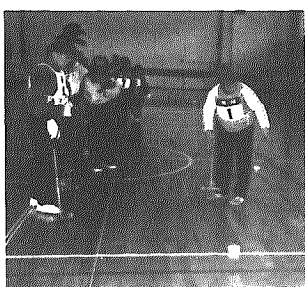
これは十一月に行った大野市を利用した街頭キャンペーンと毎年結立の黒埼荘で開いている「年金と民謡のつどい」が高く評価されたものです。黒埼町がこの賞を受賞したのは一昨年に続いて二回目。



これを契機により皆さんのための国民年金として努力していく所存です。今後ともよろしくお願いします。

CPクラブが優勝

室内ゲートボール大会



二月十九日(日)、総合体育館で開かれた黒埼町室内ゲートボール選手権大会で、CPクラブ(斉藤俊雄、玉木国作、佐藤正、関本公平、高橋勇の

母校を見よう

黒埼中学校の卒業式が三月十三日(火)、各小学校の卒業式が二十三日(金)に行われました。卒業生は

学校	男	女	合計
大野小	90	85	175
山田小	37	32	69
立山小	30	29	59
木場小	17	10	27
黒鳥小	11	5	16
板井小	6	8	14
合計	191	169	360
黒埼中	178	176	354

黒埼町の今昔

秋の地蔵宵宮

九月二日は新町の地蔵宵宮の日である。このお祭りは驚きの木の林葉寺の僧によって祭事が行われる。昔は、この地蔵宵宮の晩、地蔵様の前を中心にして道路で盛大に盆踊り大会が行われていた。



E. Miyata

風習行事...その四

雪の降る夜、小さい手に提灯

を下げ町内を周った寒奉加

九月の節句

十月五日は一月遅れの九月節句である。四日は宵節句で早仕まいし、五日は休業した。商人だけは掛取りで忙しかつた。

小学校の秋の運動会

十月に入って間もなく、大

野小の秋の運動会が行われた。昔はこの家にもお

ぜいの子供がいた。娯楽も少なかった。当時の家族ぐるみ、町ぐるみで楽しむ年中行事のようなものだった。

恵比須講

十一月二十日は恵比須講の日である。商家で商売繁盛を祝福して恵比須様を祭った。

ふいご祭り

この祭りは鍛冶屋、鋳物師など常にふいごを使う人たちがする祭り。祭神は金屋子神(かなやこのかみ)や稲荷神(いなりのかみ)である。戦前、黒埼村でふいごを使う業者は十四、五軒あった。

七区の箱四さんや栗町の丸作さんの話によると、村の鍛冶屋がふいごを使っていたのは昭和十二、三年ごろまで。だんだん動力に変わったようである。(注)ふいごは金属やガラスを作りだすとき、火力を強めるため火に風を送りこむ装置である。

ふいごに使われた燃料は、江戸時代から昭和初期まで炭

であった。わたしが小さいころ、近所の鍛冶屋でコークスを使っているのを見たことがあるが、コークスが用いられたのは何年もなかったそうである。

ふいご祭り

ふいご祭りは鍛冶屋にとつては直接生活につながっている。鎮守の祭りよりも重要と考えていたという。

その日は朝から仕事を休み、火口の「鉄くず」を取り除き

道具を揃え、稲荷様や金屋子神を祭り、御神酒とみかんなどを供えた。夜は親方の家で親類や前の弟子たちと交い、にぎやかに寄合ったという。

七五三

昔は子どもで生活が苦しく、七五三を祝う人はほとんどいなくなった。

報恩講(ほんこうと言った) 祖師親鸞の御命日に報恩のために行う法要であるが、昔から町の人たちは宗旨を問わず、ほんこうの日にはだんごを作った。これをほんこうだんごという。子供たちはこの日に新しい下駄や着物を買ってもらった。

師走と節季(せき)

一月一日〜一月三十一日 師走とは辞書に陰暦十二月の異称、極月とある。年の締めくくりの月である。町の人

私たちは「節季(せき)」と呼んだ。商店にとって大切な年二

回(盆と暮)の売掛金の回収時期である。 当時は大体、ついで買って支払いの半年(盆)か一年(暮)あとだったから、この時期をのがすとまた翌年の盆か暮まで待たねばならなかった。商店は家中総出で掛け取りに回った。

懐かしい風習の一つに町の女の子たちの寒奉加がある。こ

れは町内に神社や地蔵尊のある地域の七歳から十二歳くらいまでの女の子たちが、一月六日の寒入りから二月六日の寒明けまでの三十日間、自発的に行った風習である。

夕食後、雪の散らつく暗い

町並み「なーむー、こんびらー、だいがーげん」と唱えながら、小さい手に弓張提灯を持ち鈴を鳴らして回った。回向の言葉を唱えながら回るうちに「あげつれー」と声がかかる。子供たちはその家の前に並びみんで「南無金比羅様の御利益をもって、家内

安全火災消滅厄病よけ、水難火難をおのがせたまえの南無金比羅大権現」と唱えた。そして、家の人が差し出す何銭かの御喜捨の銭を、赤くはじかんだ小さな手で受け取ると「ありがたかつたれエ」と礼を言っていた。

女の子たちのこの一カ月の奉加の期間中

でいちばんの楽しみは、大晦日(歳夜)の晩の奉加廻りだった。この日二、三人づつに別れた彼女たちは「今晚歳暮おめでとございませう」と言って家々を一軒一軒まわった。すると「寒いがんね大御苦勞だのう」とねぎらいの言葉をお金やみかんなどと一緒に与えてくれた。

寒奉加の子供は、新町(地蔵尊)諏訪町(諏訪様、金比羅様)、五区(太子様)、新地長君小路(うばさま)、新田町(稲荷様)などいく組かで参加した。

この六組の子供たちの行列が、寒い「寒」の夜「チリン」「チリン」と鈴を鳴らし、白い息を吐きながら、可愛いらしい声で回向を唱えて行き交うさまは冬の町の代表的風物詩であった。

子供たちの唱える回向の言葉は、すでに故人となられたが鈴木イ子さん(新町)の話によれば、明治初期ごろから

伝えられたものという。